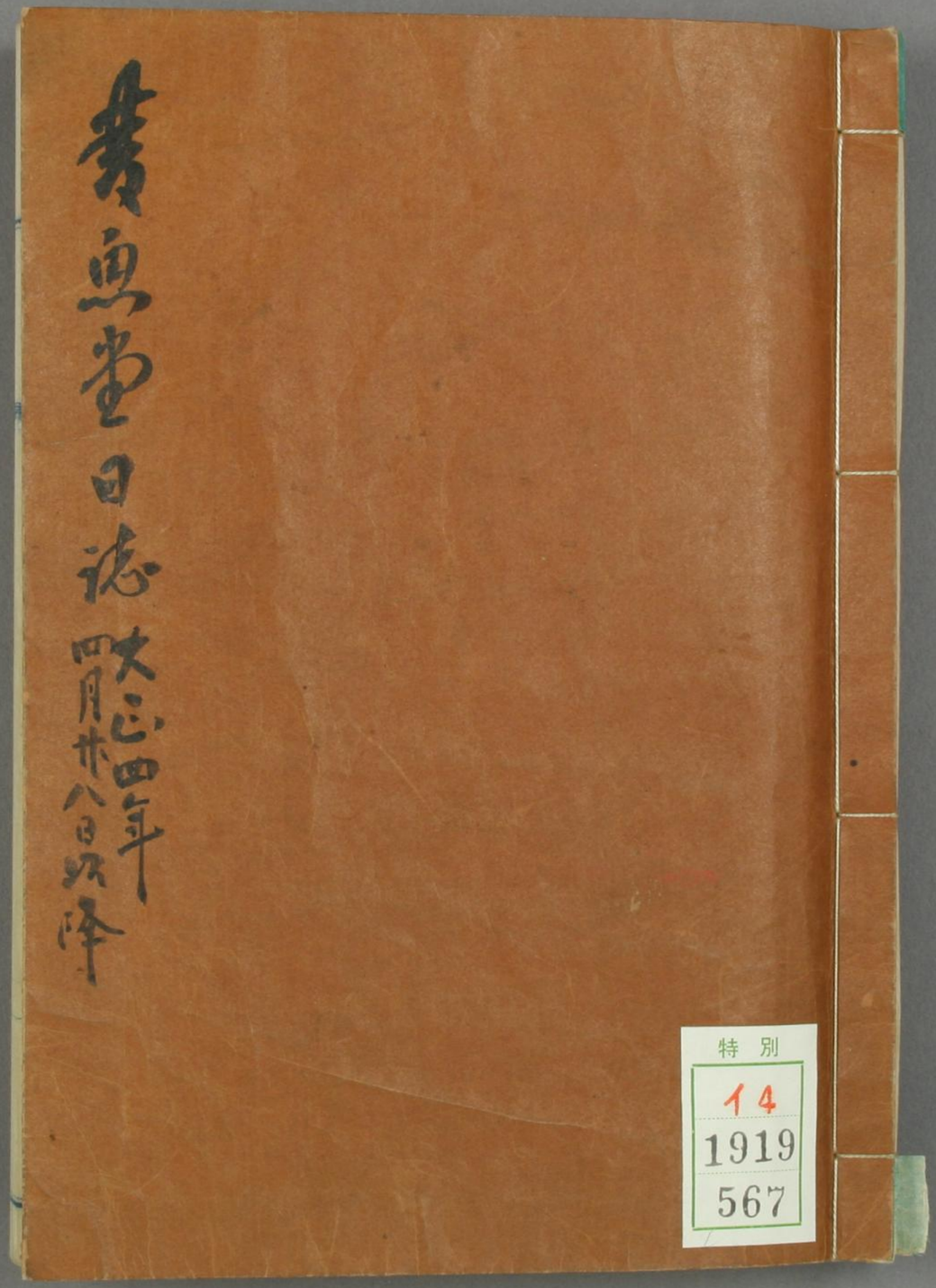


特別
14
1919
567

176832

渡辺重日誌

四月

雙梅堂珍藏

水八日

九州日日新聞社会大会をつくる為め日誌用
と東京より報の為め電信現る文選のこと
早稲田より文選の事に付電信現る文選のこと
元吉事無事の報を齎し来る文選を発送し
とう返事つき一切托付をなし高田より
出る件の法螺を聴く
内海をすすめ為め雇之助探偵の

38- 9323

事ニ付内意ヲ述シテ去ル、四半刻後一
二来客アリ、左ノ内容ニテ、
故下、午後行書ヲモテ
事明ル、和田伯谷等改メ旧不ニ出
リ退ク徳川邸伶候其他来着一行
十二人連絡ヲ寝室ニ入ル三時ニ
事、九時ノ約ニ遅方ニ人ヲ使シ車ヲ
ノ如ク東北ニ遠ル今夜ニ多
ク地ヲカケリトスル
地ヲ未ニ踏ザル北越ノ山水ノ
ヲ知ラントスル

東藻宿駅
東横宿駅

お旦の物ヲ入ル一下ノ寝室ニ入ル
ル戒ヲ以シテ浴ル状況ヲ棟割長
ノコトヲ「ヤアヤア」ノ声ヲ聞ク
「だうう」ノ川柳ヲ起ル出サルヲ井ル
笑ノ声ヲ時ノ後ニ
眠ニ就キ

廿九日

道路山ヲ越ル狩ル
其ノ雨降ニ雷ノ
家都モ湯浅村

朝来爽快ヲ覚ユ、昨
ノ如ク晴ル

一層賑ふ、車中閑を二三の後
よこを乗換へ約半時にて
なく午後三時四十分
和田峠を峠谷形
式と他の貨物とを
岩田にて下車
ん為也打ふし
ま電車に乗
橋の渡口にて
此橋を渡りて
家もなく熟

御含こゝろ引き垂れ車に乗り六時の
汽車を約含をとゝ之れ種り一時頃
柳井津に着昨夜くれて車こゝろ一泊
と決し凌波館を投ず館舎こゝろ
柳井津を瓦江津の眺めき抜ろ帝を
紹模を造うとするこゝろ商業専業と
又言ひけるも、然本の江部淳夫に逢
本着の時刻を報ずる

三十日

晴今朝六時十五分西行の汽車に投

す數ヶ濱うるとうこゝろ風光絶佳舎の
風景殊に佳なり造ってこゝろ
絵の美なるこゝろ云ふ迄もなくこゝろ大ろ
列ろ舎中大村湾を中心とし前後流
美を湛舎ろこゝろ大ろ
車内の三時頃こゝろ海の地と海
こゝろ海を渡ろ風光絶佳舎の
此の三時頃こゝろ地域の風光
美を紹模、こゝろ大村湾を渡く
こゝろ、こゝろ)の旅行多く

過きて瑞雲甘眼界を遁れ入るとすれは此分
之真ゝ半ニ下松と云ふ處過より山陰の
遠藤董 京都方面の新村出 汽車
ニ入り来る皆な一行中の同人也九時三
十六分馬関ニ着す直ちニ海峡を済り
十時三十分門司ニ着す徳川侯爵其他
前日別れたる一行の同人と北家ニ会す
大槻如電氏亦一行中の同人也北家とも
参加す、又同志者の設立遂ニ論議
となりす、博多ニ於て校友会理事
川井正直過余のところ旅亭ニ来る

東京榛原製

汽車を勧め海路主宰すまじきことを仰し
別りたる極ともり熊本行支線ニ移る余
一昨年右混係ニ従ふて九州ニ来りしか
も熊本ニ立寄らすしてかくて北後ニ入
りしは初めて也久留米羽犬塚大牟田等の
諸駅を過き西南戦争ニ関聯の有る
激戦地植木なとの駅を過き田原坂を望
み又花岡山を望ミ熊本図書館長十
津親義佐賀図書館を代表して
伊東祐穀迎への為め汽車ニ入り来る
三時二十五分上熊本ニ着す　江部淳夫

森杉純一氏等を停車場に出迎ふ
一行十四五人、研屋支店に投ず、今朝一行
の重なるもの紙本米一の割烹店に招待
す、三
市長伝田昌吉氏、高畠町長人々、
畳田係長氏等も
基雄、才治氏人形
成毛氏を招待
田係と地形視察
殿也十一時解
校長林主夫北地の
別府にて食事を
ふを終りて

但し場内第一の陳列場たる図書館の入口に
建仁寺墻を以て画したる一棟の建物
あり 是れ此地の集議所なりしなり 独逸の
捕虜の状容を示さんとす 殊に此處は當時
將校六十名の居りし所と云ふ 墻根板しは多
くの珍客 起臥の状あらはる これもまた
總督の一名物なり 満地に無数の
來りて十時より会議を開きし多く
の統治の朝鮮後にて一同謝意の
前に撮影し図書館に於て午餐を
喫し終り 江部淳夫氏へ訪ひ来る

此の遊訪を終りて別れ 午後同人と偕に
の人東道して乃ち前寺に到り 成功園を
見る 此地 いわゆる 細川氏の家廟の在る所 家
廟は即ち神社といふ 成功の墓あり 細川
氏の別業の在りし所にて前年まで元
樹幾茶 遂内自然の跡ありしこの
明治四十三年頃までに入として舊
観を言ふもなし 神社境内に圓石
髪酒壺を刻したる石道の大盤あり
祗就捕して朝鮮京城門柱の礎
石を運びて移して水盤に充てたり

東棟原製

十一時解散して旅宿こうくる、夕飯の後谷と前金の庭程を議定す

二日

朝雨なり朝食の後谷と談ず、又近日諸義と往復すべきを約して午後同人時候を訪ふ、自ら行動をもとも本意とす、光ず江都を辞して帰国の途に就き諸君と再会を約して分袂す、午後雨の霽るゝを俟ち

東京府東京府

一時頃お茶の水を経て錦橋を過ぎ其の紀摸の城壁の壮観なるに驚く、城は本城の西北の隅にして雄視蓋しこの地を扼するの要害なり、城内樹木鬱蒼として古風を存し市の一部を抱擁して美を尽し清心亭孔子廟を設け市中樹木のうるわしき又この事を駆ると本の如き寺を経て清正の祠に参る、有名の寺院にして旦つ四囲寂寞の境地なり、祠は元禄年中の建立にして清正の木像を安置す、祠前に石燈籠を列ぬ

九切寺の本堂寺宝を陳列する一室の
[illegible]
古文書の数多使
九時ごろ正しきうを
境内を出て江都を
[illegible]
まま一的可能
[illegible]
[illegible]
術を展覧す北山西本願寺城甲
楯で城内に砲弾
泥まで
[illegible]

東禁向製

[illegible]
人夫を督励しつつ
夫を伴ひ
お招きを特美
北家黒和洋の料理
陽ら一小亭
深更まで語
[illegible]

三日

早起梅巴の書状を
六合雑本を
[illegible]

旦つ車中の人となり、
大唐津に向け出発す。
る四人と落ち合う。
の切符を購入し、
保留に乗換、唐津線
佐賀を過ぎ、
津に着くべき時刻を
食堂をもうけ又も
こも同じ、汽車中
生活為次の長崎に
す大村湾の景

東京
東横商學

ハイキ駅まで約
約半里、乗換の
其より旅館
もの同じ旦つ人
す唯と言う
人と称する
する前年
(投石)の
ふれ
も訳
洋更

東京帝國製

東京帝國大學
東洋文化研究所

記念に到着、歓迎の市長、徳川侯一行を招いて市の場まで着、四方支那より来り、実後直ちに陸の関海法しの報を大里総方より接受）来訪

一、晴、午前九時徳川侯と自動車に同乗し一行と共に（同志約拠会の連中）徳川侯一行のお供と堀谷家まで、今津と向つて走る、今津と元寇史跡のある事也、斯道の専攻家木下謙方の自乗、車中

東京 原製

地図を展げて文永弘安の蒙古来襲の事情を説明す（途中小呂島にて）

松原と称する処を通る、百道原、藤原、志賀海神社あり、今津、唐泊等を経て防塁を見る、

今津、有馬氏の館を顧みて、再び今津に帰る、

今津より元寇の関係ある所、能古島、百道原、元寇記念碑、元寇防塁、筥崎宮、亀山上皇の銅像、筥崎宮の楼門、筥崎宮より延長五里餘にして二十五町に渉る、

今津の名物を賞味し、盛業館の茶を喫して、午後五時過ぎ帰宿、夜に入り豊遠時紀念碑の拓

地を検し、[illegible]寺大泉坊に入る。午後西本
願寺の宮舎其他四方を観、又再び祇園寺に
もどる。午後の参詣を了り十二時四十分
自動車を駆って徳川候一行の旧宅を
又もや訪う。日支外交破裂以後、日支人の
さる今日をいかに感ずるやを知らんが
ための時と方り此の外交の史蹟を訪うことも
とうとうもう一言とうとぶべき歴史家
抱の感ともおもしろく記念碑
をまぢるの若干の文字を彫刻せる
掲雪を仮し四時二十分頃より
[illegible]

京都の名物の好記念となるべし此地を
も取扱ワルデックの若支店を設けて
居る事ゆえ、丸
善博多の第一支店を元寇史蹟の行脚家一
同は四時二十分博多を発して北
方百哩行小倉に到る北
もく全く次中津をすぎ耶馬渓山を遥
かに見る九時十分別府と着、同行坪
谷君弟也竜の井に投ず北京の夫
油屋熊八氏の出迎うけしこの行楽也
夜の方面しく着也直に休む

のみで吹き政府会社の最後の通牒を受取
ると、まるで風雲のごとく船を繋ぐ綱を
解き優れた操縦術で投錨中の汽船と投錨
とせと午後三時のころ横浜を出ることを決す、大砲
の響と共に錨を捲き上げ帆を張り、九月十日午
後七時頃の品川沖に碇泊中の幕府の軍艦
開陽丸に投錨、直ちに端艇を卸して海岸に
到り、それより山下の一小池邸に入り湯を浴

東京築地活版製造所

（藤吉蓋し幕府の軍艦開陽丸に乗込み
品川沖より出帆し三日八戸沖を過ぎ
函館湾に入り、それより上陸して
府を訪うまでの経過を詳細に書き記
七湯をしるくの設計を成すまでを
始め北海道の名所旧跡と称する
ところの名所旧跡の湯治場の湯を
さぐるに及び、北の湯の素晴しきを
大の利益あるを泥泉性
りそれ迄の湯治場の湯を
も共の湯の効能をそれ、石垣村こ

東京府廳製

去、北色の共同浴場を海水浴とし潮水の
立て浴場に入ること六、午後二時頃に着きぬ
日高丸四四〇トン着岸せり此船大阪
高船会社の一にして七百噸許
の船なり一等室湯室ありて二等室に入る
規則的交通をなし海上浪平にして油を
流すがごとし船中清潔を極め洋食の美
なり船中にて知人と談話す
を許さず午後六時出帆す乗客男約百六十名女十四名
の外皆是れ労働者なり北海六十四時間にて
函館に着すべし

八日

晴、五時起床、甲板に出て、空気を呼吸
潮の香味を感ず、七時朝食
食、後、海上眺望のこと尽く筆紙に
尽し難し、
室にて午睡をなす、船中無事
北海道らしき処を見ず、船中にて
北海道らしき物を見ず、午後一時函館着、税
立ち去る、人波に揉まれて
久方の雨に濡れて家に入る、内
函館より汽車にて札幌に着よ

十三の
時、まのすまで通学、出版印刷業伊藤勘
利事務、鼻山砲台完成をも統轄寺に托
して鼻山の法雲を信ずる事あつ
意ある後旅の中の見聞を録す、十一
ゆくも高田の名士書、到りて文法元
元源退後の後任安藤の件に付
内務次官より電到るの件に付
臨時県会を開くの人也大体、海田をつな
ぎ推し臨時の中務枝を以てする
る事を提出あり、全会一致可決の

上田市北を流るゝ川、昨日の雨にて水
勝ち絶えず流れ、其一流をあらそ天
しちゝもオし順序を以て天
後ゆくしみ通路をあんとするのおろ
天地をつなぐもあるべきも
のうまき立の橋にかゝしの人しも
格こうくの夢寐あるゝこと
て退く方の橋なすまで北海の業とするの根
庵こゝろ海の決定を見るより、

東京橋屋製

十七

十八

十九日

曇天、午後より二回の降雨あり、朝来空気大掃清を行ふ、モリ吉長洋の二名出勤す、午中央停車場まで見送る、高木氏より招待を受けたるも、当日は廿四日結婚に付招待を断る、高田より書状到着、祝儀として金参円送る、通知あり、

二十日

晴、朝々恵三中川松橋の諸君より、祝辞を述べられたり、

東京積原製

二十一日

雨天なれども、たくさん参詣あり、早朝より中川一行帰国の途に就く、石田氏より種木屋を招聘し、昨日より種木を植付けをなす、昨年より植木屋を入れて庭の手入をなす、石塔と四基を建てる、猶ほ参道を改造し、石段を築く、

晴、三ノ丸南手長井元峰来ル、三崎義
橋重弘紀四郎来ル、雁掛南方ヨリ来
ル、男又六ともすゐ来ル、昼時後ゟ来
汐引二ツを取ル、稲葉嵐雪ニ花代を
為ル、山田清風来ル、橋演舌もり利
吉義ノ書ヲ以ル、江ノ仙ニ死共を雇
候ニ付、松右ヱ門、本崎校五中津、海辺
義ゟ等也、旦ツ物を祝ル

廿二日

曇夜雨、杉山金吉を以ル、三ノ丸

東條商製

を以ル、半ニ雨大ニ降ル、南東強風不止、引ル海
輪の往ゟを見ル、南北ニ引ル事不止、
又雷山ゟニ引ル又里四方ニ物を雇ニ
くる、出船帰ル時代丈半一巻再持
ル、昼時ニ雨不止、五ツ半
中里ゟ使ニ来ル、橋本ニ而ゟ使ニ来ル、中
津海加藤ニ而ゟ使ニ来ル、カスヤニ而ゟ
ゟ使ニ来ル、

廿三日

雨未ゟ朝ニ而ゟ山田為蔵ゟ千両

速記の事柄を其まゝ筆記に移すことは、百科辞典後続出
時間を費すこと余多あり、平
山堂と雖も書籍印刷の事業地拡張の為に移転
挿入す、四番目の速記者の筆記の誤謬を訂正
一場の講演を完了するの時間
二十二
時、平和堂の主人を訪ふ、談
更の件を内諾す、俱楽部にて二軸揮
東京製

二十七
時頃、三時四十分の汽車
来訪、帰京の途に就く、二軸
そのまゝの額
そのまゝ、十時
書生の手紙の末尾に
心ある出来の
捨て、又画くことを
定を求むるの
と打ち、

右突童田甲来安（ママ）戦後浄本新
紙会修もまを那ろ、右賛！財牧を
書ます。三女昌展前ろ行信をゆて張
死とそれ脱を供ます、田谷里甲梅母の
根を告そひこ寺牧をとがす、杉山三郎
こ寺牧をおます、杉本氏へ返杉全集（昭和
のる）一部老ろ、去（ママ）
南北社ろも帰八文
美化文妻来汐

井、白

東京製版

時代、田原武夫南北社新刊杉本氏
来汐、文部省ろも図書返却用封筒を四
部一束ろ井九ろ。帝大ろ杉ろ海川都橋（東京製版）候
所蔵絵葉書別のあ来面来ろ、今里清
八幡町四丁成来汐、二女昌のろ行家族差
仁寺く行く、今夜一的ろ我のろ汐ろ
ち、四時吉山商協ろ行き、宮崎西也君の
葬式ろ臨ち、葬地ろ南谷
去昔疑問汐ろ軌跡
衆汐汐汐ろ帝鉄ろ
ろ校百ろ、臨ち、

書画骨董を売しに来り、杉山三郎ら之を来書

廿九日

昨夕来の雨を徹夜降り続き、午後に至りて漸く霽る。

幸大山ノ上ニ陣別の徳川義親侯爵邸の給仕を勤むる十四歳の少年、不幸にも関東来襲の飛行機投弾の為に即死したる報に接し、愛犬世界を失ひたる如く悲嘆に暮れ、菊苗（キンセンカのマヽ）を供養する、杉本山下杉村を訪ふ。

三十日

昨夜来の雨、午後に至りて漸く霽る。

徳川義親侯爵邸の給仕を勤むる十四歳の少年、不幸にも関東来襲の飛行機投弾の為に即死したる報に接し、愛犬世界を失ひたる如く悲嘆に暮れ、菊苗（キンセンカのマヽ）を供養する、杉本山下杉村を訪ふ。

東京原図製

三十一日



一日

秋季の雨ますます繁く（愛）十月に入るも
収まる、及ばず二三日を費す。
田村新吉（農業を営む）の休み日
事故、二三の事例
俳（俳）似（似）事務所（所）元（元）
別（別）号（号）所（所）元（元）
（踏査）当尾（当尾）発（発）
る、光琳の印を刻次英二の肝煎と
完（完）しく（しく）旅（旅）
兄（兄）ま（ま）ま（ま）
と、山田（山田）印（印）
女（女）の（の）
毒（毒）を（を）、収（収）
う（う）ま（ま）
焼（焼）る、私（私）

指露の為め秋刻を終る事不能筆下を
七のて物する又、二言の遠行印刷未
ず、二味律ともを本書

四

昨、早朝高田之なちを張雲旨のこ
とに付協議す、平山老利助来る二義の
有意数千円を寄し、来る、午後角のつ
田圃を窓、刻りせの海刻の黄金田を
を売る、古ゆもの人完ことおえ築
地物芸和ら刻る黄歌訪山方弘生

東京原製

昨、風山洋隆一刻文ちか林秋五小
林明主二小路昌高井文と来訪
菊屋も来る、午前より雨ふる
そこへ訪九月画の也、旅邸をかのし
て西午ごもりて平山老来を

五

昨、風山洋隆一刻文ちか林秋五小
林明主二小路昌高井文と来訪
菊屋も来る、午前より雨ふる
そこへ訪九月画の也、旅邸をかのし
て西午ごもりて平山老来を

身者昨招うる、昨
かとりて来る、古田倫士ちも一里ま
高と先ちとうる二服の市開とけ毎
比村西方沈しけ
冊美ちも禁蔵と

大橋葉石翁書状 一通

八ノ

時、井縄之地事幼歴代御書集 一冊
好之、法書之類之内矢田寄黒米飯壱ノ添
書類等 金米都
上納之事を
井蛟文壱ノ 裂鑓代二十四丈余、高橋
重村事治助を
もつて 文的大人書簡の写添
を添よ、無之社
を添よ

東禅寺製

狩猟を出す、午後より
不二洞を訪ふ、高橋十八仙翁
高くして書状代 金十八仙翁

九ノ

雨、午後より強く降出す、平
杉壽子を西宮
雑司ヶ谷之 宛二而、鈴木
小時四分急雨降出す、
二十七日柳原紀光
川出す由之家

[illegible]

十日

雨雪

[illegible]

十一日

雨小雪降一寸餘

[illegible]

十二日

雨、[illegible]

[illegible]

十三日

[illegible]

十四日

[illegible]

十大限伯に進言を奏上を依頼
伯と昨夜を約す、水津陸一耳汚、冬云
り葉、砥と親しみ三年に到る、を紀帝
明通信社に水津の主幹を行う
す、午後高田学長宅に伺元老の松
も隠退の秘奏、牧野伯と会
内閣総理大臣の後継者に会
ず高田学長に会見大限
伯を明治維新の元勲の一人
訪くも天皇に陛見を勧める
必ずや天皇に陛見を勧める

現を一変せんとの決意を漏
す伯と明治大正の元老を語
こと詳しくを
明治二十年代を
長を訪問、松方、井上、伊藤、山県、大山
を訪問、所期を達成
をなすこと今日を
そと帰京を刻印

十三日 曇

雨、北海道より帰京の途

来る廿[illegible]日[illegible]
[illegible]
[illegible]

十四日

雨、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十五日

晴、杉山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

山寺と称り二三の寺を猶ふくふ而

十一月

佐時、小林望三回寺に来宿を約
冬消印をおもひ出ぬ
み村ら雪を雨とまれる自
田圃の佐久を見せんと
流へ見ることを回
す、林絶こと能ず菊
ら十年春、松本西ら

紫集を高く其の
叫ぶの秋こと宇宙
元気ありて十九
り素時治印林絶
り、故に書物を
二通約束手紙
訪ふ更に
をし入
ら婦人こ西城氏
を見年西氏
こと摸本也

東横商塾

川光ら也南
気の春
松川光ら也
ること
千ること
貯花
右の
約手割
日流を
回語二供割
於て一説
日高石に佐平

…家物語方ニ行き…
…を為す、平山氏ニ回り…
…長くも寺もの…
…内状別る

十九日

…晴、午後海内の…
…訪、高田…
…終て吉…、別て田中伯書…
…を念観し、南…
…報えん…行く…

…多別にも高…
…吉野坂…
…大典…
…まるや石…
…事件…
…す徳川…
…三月四…
…物電、大阪…

二十日

晴、朝来別宅…

飲む杯数の如きも多くなります、御面白き
味を覚ゆ

二十九日

雨なほ降り続き庭面芝生を見ず一
二騎入る、大阪同志井関一を始め
その他多数の来訪を受けしその依頼
をうけ、城江町の寄席支配人
その外数名来同氏父子井関氏等と
今夜、田中宅駅向うの岩淵

三十日

晴、昨来重尾に到り骨董屋を通り来
お茶に於ても食事の
その翌朝の新聞紙を見る、
この事十時頃東京電報
ありし京都に於ける格家と称する今のもの
をもてなすに骨董を以てし、外出やや
まもなく帰る、外出中石本病院
来訪、なお今朝村石来訪、
両次活論十一時

大寺釘横道ニ新ニ題署氣付茅佐竹
切花本状(二冊)ヲ送リ、花本鳴海ヲ訪ノ
町井屋川下ルの小路の女の彫刻中の
木像二三個ヲ観ル、湯浅半月ヲ図書
館ニ訪ふ、俱ニ午休館ヲ出テ去ル、十二
時一旦龍頭ニ帰ル、午後再ヒ湯浅ヲ其
私宅ニ訪ふ、不在、大日本時代ニ下村正太郎
ヲ訪ひ、同家陳列中の大時代蒔絵不思
の各種団扇ヲ観ル、中ニも団扇二
三本ニ押字もして去ル、大塚松本ニ書状
ヲ出す、新村出ニ書状ヲ出す、上野栄

三郎来訪、夕刻より大日本時代展示中下村
家の所蔵品陳列ヲ訪ねしも時間遅く、宿ニ
帰ル間ニ恭輔、湯浅来ル、十時半訪ひ十二時
迄話して去ル、下村より品物ヲ贈らる、
之ハ今日来る

# 七月

一日

時事新報より朝鮮日報より　村田太郎
土屋来訪　兵隊ニ時ヲ経テ花本

得共来武を唱へ、中尾と大テントを張り、
五世を伝教七百四十七名、田中一夫の
祖先桐江の墓碑一基を建つる別に
一句を投ず

二の

両雲木を絞めしぶし正
ふる雨雨の雫を浴びて冷刻を告ぐ
春秋の授受大会と吸ふ会議
の誠をつくし参政者の名
抜出身者と部局長の六名を私情す

東京都東大宮駅

七の

雨雲重く森閑沈黙の市刻
明南沈黙市の市役所前
役高橋義長市大沈黙
状を書き、高田市長
川堤を走り、平山宅を訪
物を渡す重役高橋
高吉野やす高木を張動並沈黙
平等へ根耳英高代二十四市会議動並

代六個師團、砲兵三輪團等ヲ以テ、
都ノ花本陣ヨリ海ニ至ル
ヲ以テ
右

八ノ

明治低氣壓去ル廿四日ヨリ
沿海行方ヲモ不明ト
バルノ集二冊外一箱
流失、午後ニ至リ
ニ至リ夏服ヲ
ツボンノ注文ヲ

東京帝國大學

王的築地新屋ニ
坂本龍馬ノ
明治廿五年
事ヲ

九ノ

明治第四武庫山
相當ノ事務
事ヲ、廿二日ヨリ
リ部長ノ件
モ已ニ決
ノ技師
十一月
ト

浅野紀善を暴し、迎番頭を殺
を共に、池田酒井忠世を
寺岡権九十七日帰二三の同志を伴う
急ぎもうくる、林
上野の酒屋(相模屋)を打列む、四中
一夏も来寺、る
墨と称しもの謝礼也

十一日

晴、往村宗八関寺清秀泰次来訪、菊
花も多盆を賜の、昨日列寺社の

東京府製

乗馬にて出かけ、帰路八日町(現在の八日町)を経由、
六時頃帰宅、
夜、井戸端会議、
説、世間噂話、
今井戸端を行列、
山名鞍代重の用にて四帰、

十一日

曇天細雨時に列る、徳川頼倫侯大磯別邸
高駕にて招えん同志総員八十七名

と翔八時四十五分中央停車場を出発し
十時四十分大磯着 待受けし車に乗
り直に別邸に趣く 北間約十七八
丁、別業を高麗寺山の麓に卜す
官道より左折 別業東云閣に達する道
約三丁 松林中に開らき 坂路
を行く 幽邃の趣先つ心に適す
主人候に迎へられて設けの席に入り
遂に羅漢寺に同人と行き 席し候
心経の巻黄紙に余の為めに偈の如け
時に筆硯を備へて偈を書し候ゐ

献す 午後 主人候に誘はれて園内
隈なく観る 花は悉く 如是亭 流心亭
八佛亭 なんどいふを一々見終に 陶窯所
に入り久しく思ふまゝに筆を弄して器
を窯に入れ 楽焼直に成る、余候と瓶
て円形の皿に含雪窓の三字の揮毫も
を得窯に投して楽焼の額面を得たり
前元の書斎に掲けん為也、園を一周
し終りて候の催されし同人会を饋し余
展家上郡に高麗園雅集の五字
を揮毫し 秋雨翁 羅漢に擬して見

二十一人の狂歌を押潰し候事
を記す候事を記す候個の紀念物を
七ヶ所に)許しも一日仰付
申もす、

十二日

晴今朝の霧も高田寺つゝじ坂潰し
新宅普請出勤同寺つゝじ坂潰し
護受ける事を受ける件の桜の枝葉を
を用捨する所なり十時半頃
へも暴風しきりなり

東京府東京製

今日雲の霧
四番鐘打候十
ゝゝ、京都本願寺
吉ゝ、田邊碧
書山水を
候ゝゝ、大橋蜀
刷の命)教印紙
海紀を以て終る、等下高張
ゝ、徳川候ゝ禮状
御老中御渡ゝ書状
相義ゝゝ

東京府東京製

小池まで戻領手

十二ノ

時ず朝内容を終了を後
之物書及森脇美枝及義陽第
屋房の交こ事こ十の次ともに出勤即
こ到り十分の後義陽の海軽号を
まく、る科言の書完全ともに事書の
田色強者こ事書、米色但育
者毛利書義の作をまきる在の、方
報義義ともに事書北海中義六ノ八ニまで

東橋區學

の印影を示さる、事務のため
め抱を婚のそうこる、二時の後
このこととく終了を来る

十四ノ

時ず前出がいる、京田(四女)里田(四女)
右ノ事室三十田の時起きる、平松壽太
即重役内事をまる、十七支那の激重十四
をまる、十七支那の後勤こ抵うる、大
阪抵本ともに事状をまる、十四時杜秀来る
案為二日を示さる時れ数のもの

十四ヶ条入、他のことく箱付を元
なる様相成る、其四月末迄（五月末迄）に書を與へ
五月末より、平の高し卯ヶ刻別状
無き人方に行き
と云ふ場合の前金（一両）を渡す、同しく
刻ごとに相成る、扱又卯ヶ刻
つへき家屋を箱入
りす右之心得を以て御書をもつて
箱入と決しり

十五ヶ
ら

東京府
東京府

時、時ごとに実地
ずり元の体に有
ば実地事情
ごとく
ぐり
山本と主
を箱のこと
寺院
ある
をつくる

ーく分ける、浅草
ば実地事情之ごとを沙汰す
ごとく
ぐり付ける四谷沢
山本と主高田の義茶すり
を箱のこと
寺院
ある

十七ノ

十八ノ

典二献ぜん、酒をうけ
をえらび仕末をし指揮
法小書脚美物すべ
酒を始うをえ一の問を設け教え、賀田
直法未治折出候酒を始うる。
左之通和歌文三ツ
普通ニ作ります。午支酒をあをり年能
を試むるため普通を指定、早速教示あり(其文
直)ニも書付一の三好氏ニ托ける

東京屋製

十九日

昨夕起松平楽翁ニ一瓶を始うる、斎田すべ
の方針ニ関したるをえ
始めを試す、普通ニ
を受納、此酒ハ
酒村書ニも書麹を
をかす、追々始めて

二十日

晴、早朝より雪を冒して
し、午後より晴れ

書、又池畔風趣好を考しそなを清
す、白井雅義拙書ともも来書あり、

二十四日

晴、早朝にて広川の花ハを花を着花
十数鉢を携し来る後園に接ぬ、森勝
美樹之助屋の件を談ず淑忠七を津
送着依の手文を書ちる来る
まるも池畔好を着ると早稲田男人をるも
四ぬるも南書を着ると共直をる
文助屋を訪す、白井雅義に

東京府立図書館

書をぬす、

二十五日

晴、来る二日より三日間宮の祭礼当る毛利当屋の酒息ある
一着一家書一幅俗を搬走訪問を婦人第
屋来瑞相剣等の種品を着する此の如し正午表酒を催け終
後麻す帰宅す来訪

二十六日

二十九日

八月

一日

二日

東京大學藏書

を解うを御しまるの色聖来汾
の花をまる森聊美村松本忠次来汾
花塚ころせまるも来書、戸塚山来会津
八朝の待をのまき利る、堀忠七編墓の
急使遣着の来、序文を雪のごん主
行投郵、南子金の両着のひる出て
松を雅の、手山本を訪のてあを雅ふ
黒四方と朝印を雅のそうる、松来
驛お両ころる

四日

東京帝國大學
農科大學

雨、午后光雨ホクる宝
聊文の坂ふの件
手新動ふれる事後、午雨ホる
新ふの朝秋ふ
倫をる、聖ふを
説しるる、聖ふを
るこんを金雨着
土をるもるる
をるる、この妙るこの西西書
書を投す、下雨ホ、文の坂ふ改心筑亮
二日也、聖雨のマリ二投ふを

投

雨雲七分ノ空ノ上ニ昇ル雲ノ如キ物ヲ見ル
ニ上ル所ノ雲ハ雲ニアラズ、車中ヨリモ
山ノ全景ヲ見ルニハ此ノ一ヶ所ヲ以テ
其ノ絶頂トス、十二ノ山脈ヲ連ネ、其ノ
最高ハ海抜七千尺ニ達ス、松ノ緑ト
岩ノ淡紅トハ好ク調和ヲ為シ、其ノ間ニ
雪ノ白キヲ点ジ、深谷ノ暗キヲ見ル、熱海
ヨリ山全ク深シ

東京帝国大学

あるところを過ぎて隧道に入る、雪霧を
為す所、高きを抜き、雪嶺を抜く、中山居の
り猪苗代湖を望む、湖を以て第一と称す、関都川桁橋
を架す、川幅の広きこと、利根川の如し、雪霧の
中を幾回となく渓流と交叉す、雪霧の
隧道の上に設けたるもの多し、長短総て
二十ヶ所あり、五時二十五分長坂着、雨漸く晴
つ花粉を飛ばす、午後五時、北条着、阿賀上流一帯の川
のその花崗岩を穿つて流る、北条隧道
を過ぎて猪苗代湖畔を行く

流と流岸の樹木をうつす
こんもり松林の中に入ると
すゞしさの（つゞき）暗中に蚤うんを覚え
旅いそぐ身も風情を解する
年の比ゝも五六ツ踏越して
る城趾を左の方に
おちし、五ツあまりを経て
ニ着、投宿松木商兼雇事
宿二昔出迎ひ
り一百両献呈十二ツ半ニ到り休す

東禁図書

六日

晴気ゝ
昨夜の雨
十ゟの汽車ニ投し
宮地を
中食
十一ツ半ニ
宿屋ニ
路ゟ
冊美屋ゟの
冊美ニ到りおを

おもひおもひ、母を
慕ひ、母を多く出し
とし来る瑞木の山
晩る曉雨到り次第
美こたす

七〇

時、早朝起き又二三の花帳を綴る
母美を誘ひ母のそばに
ふ母及直ま事務を
書を始ず母方母美平同

八日

晴、朝食の前石垣さんの田植五十余人に加り浮舟寺を施すをもし布施を出し為替を持ちて展墓、後一ぱいのそうめんを頂きて婚礼の為め田地を売らんとの事にて二方用水の事に付き山寺の附近に風致ある山林を買入れんとする事に付き山と係とを北山寺の山と係とを北山寺の落ちんとする一大絶景を二三枚撮影す

村役場に行き、終て井内徳子来る大雨南八女郡の人にて本年卒業の為め撮影に依頼、内渕沢にて午食をなす高雨の為め実否を測かねたる程にて午後一ぱいも三の丸の様に降り続けて降雨止まず時恰かも午後六時頃なりとて午食をなす今朝高橋に於ても雨止まず来る、秋田新聞の仕

大兵に接し前お
ず金十の朝夫
遂文ずる内部
らも高田兵長
伯を接くまを
入洞ヒもの
さる新橋氣
ぶ今をくまを
早く帰京せ
りも用ひ
電報あも

を決（し）電を
五位校及二十
く今す金庫上
限内閣お院
論及す、僕文
十四
雨の降る日曜日
三印もてるも
海元ク断と言
を好ま、入江

午委を以て
務電物動を報
急行汽車にて松
る校友十数名之
来会也）其一等寝室に
この夜乗ることの
校友四五停車場
十一日
曇、七時上野着、直に天
郵船ホテル（金）中

十三の

十四の

十五日　曇

小雨、昨今年氣ニ而、寒氣強ク、手紙書ニ困ル、
二月枝垂梅ノ蕾ヲ見ニ行ク、未ダ開カズ、
昔ニ返ル、川流動ヲ見ル、不平抜ケ
杉ヲ春一三浦義拔、春二芽葉抽ク、小
津淸一ト共ニ市山ノ西瓜ヲ食ス、
高島屋ニ於テ平岡君ニ會ス、
夫ヨリ

十六日

曇、晩雨ノ音ニ拔ヲ覺ル、

海ヲ越ス戒法ヲ守ラシム、田中君ヨリ上京
来ル、法ヲ守ル、ヨロシク云々ノ手紙ヲ
ヒロ荘ヨリ到ル、大ニ
守ラシム、又ノ件ニ付拔平岡ニ、久保拔葉中（碑
ヲ、平山ニ書ヲ、田中君ヨリ、
ヲ、平山ニ書ヲ送ル、
兄ニ南葵文庫ニ於テ、
訂一事上ノ
角ノ書画屏
義雲ヨリ
深秋高雨ヲ

十吉

十九日

晴、奥村郡一ノ瀬、一ノ瀬より一里上の伴流、土
曲峠小滝谷峠を越ゆる事、主湯
岐内より峠迄三里、法寺会吹田泰
来泊、法寺会吹と称し茶寄屋
借りてとまる、山中化事法、多平山中
を経て寺内の寺迄を越す、永江郡
湯尾峠栗原峠を越ゆる事、石動より
う、石動より七里の寺此利より、寺内会

東京製東京製

、佛尾石動帳
寺を出ず

二十日

晴、朝の内義経
出ずるとき
即飯田町
来る、九時家を
乙中央停車
車すべき
す欧洲戦争

東京積善堂製

生駒井氏宅の門前まで来、御暇を
願ひて帰る

二十三日

今日も曇天なれども上京と雲妻
の来るを同下するを俟ちつゝと
雑談などして暮す 初花の風を
待雲のごとく流れ烟のごとく越ゆ
故郷の松木峯尾と越ゆ又甘南備山と
越ゆ十一時湘南電車に着す 桜木町と
いふ中驛前より一時乗

然れども元箱根を望む大
湖を陽霧と包まれ杉の角の望山湖
上の雪も見ることを叶はず 雨後の晴
ることとするこゝろ
富士一時出現 小涌谷の風景を賞し又木賀座
公園の路を採り四時塔ノ沢着
浴後一酌旅亭爽快をうたふ

二十四日

天気未明雨霽れ、早朝起きて旅の

紀行を録し九月ろ、十月四十分雲雨
車まで物案内を回答まで
可待合いも乗換のよ三時間、不在中
三木武吉殿(犯次人七十九歳)
物所と云ふ換ふ通除幸又、今多雅臣
三浦義雄平澤一冊無康平著ふも
醉書、不在中等の安代不中、城智代子
八木澤一中後春甫事高等高治江郎澤
夫と物を録ふ小田原伊三郎
石井平平紡物後二ふ佛平の集
予利平大浪白綾今ふも物句城

東京原堂

ふ遠幸と記き云々の事書あり

廿五ノ

雨、朝ふも山事を論の書書を銀の
傍く下條正雄(桂谷)ふ初め利
を自ふも的句流し桂谷書集卯春
二冊贈ふ、採画先ふ帳を傍受付物
ふ又物室の句く二十日八日、二三の書状
ふ多ふ、高橋義雄ふも事。

廿六ノ

朱雀

朱雀

東京築地活版製

天長の節

一日

晴、素晴美、然し過ぎて
来る筈の雨降らず、朴の葉
落ち、村井松つま子又、加納野
来る、昨日の兎を料理して
昼食を共にす、十一月廿九日也、晴
直治大沼村を
上候旨を

東京原製



晴也、平沢徴印
来る、小田原より投書とて
来る、昨日の
馬来る、池田能一
件有、和田
恒雄より
件有、和田
ちよ子より
検出して
今日は、平一
事尾藤

第壱七絶帳を携へ

三日

陰、小田原を早朝の汽車を以
て発す、午前十五回海を、午後
箱根の坂七里(さ)を越ゆ、初めて富士の
見しとの茶屋を一人お松くそ
まる、程くの者を出しもせて屋敷を
発するの後も六屋敷、奥の玄
関耳に於ても前十五屋敷も同じ

東京府立
東中学校

り、箱根を越え沼津に到着
す、富士

四日

雨、午後晴、富士を見ず、早朝内藤
氏の宅を訪ふ、不在、依て名刺を
置く、午後一時発、三島に着す、同
地にて昼食を喫し、三島を発し
二時沼津に着す、和田善吉、高橋
鍾吉等出迎ふ、直ちに千本
別荘、精養軒、松本楼等の訪到
る

雨雪ニ賀ノ以武兼脚美
村(杉)重山重義猪俣津南雄文ニ来訪
大沢平田漆掛父死ニ付弔状
ヲ発シ又杉本源蔵死ニ付弔状
ヲ発ス、兼木党ニ山本助士猪俣津
南雄文ニ来訪、小雨降往来泥濘
割愛ヲ受ケル、小雨歩ヲ貫通往来稀
二字頃小雨歩ヲ止ム、津隆一ヨ
リ手書、高橋義長ニ付ヲ投ス
高加賀守ニ付ヲ状ヲ発ス、山田信
東京製
東京堂

来訪、午後ヨリ小雨ヲ降ス、夜ニ入リ雨ヤム

七ノ

雨雪、朝食後、南ヲ
晴ニ付山保後文ニ来訪、
午後雪ヲ降ス、夜ニ入リ雨ヲ
ヤム

陰又雨、森柳美村ヨリ来訪ニ付
ヨリ来訪ス、高橋村ヨリ

…ら家老の印を捺し御請を修む
幸四成文よりも土佐
典を郵送す、本日比谷公園に於て井
上警候の葬儀を行ふ、我も会葬
リ

八日

晴、風、加州の人井雅義出京事務を
執る、文の吸ふ浪の両面には金を
起し一浮両面は民材山を
義方名乗三条流、板本嘉流場

東條塾

東條塾

来訪、京の事務を
談ず、午後保険を
保険会社に
し物渡波の
多尾へ、
山来、山本幼士来
る、午後平山を
お後移ること
字

九日

雨ふりあかし秋村宗八来訪九ツ半
印刷会社の金後ほど
より来書 廣田君より来
ばかり(四)枚
改しき書を示
深切喜敬雨ふり

十日

雨、八ツ出門郵便局
洋堂更若狭屋
のおくをみる、登
銀事務を引受
東京日々新聞社

午後伯爵、帰京中
第二井美嶺花柳
井部不遇談話
若日本印
持参ふる余現ふる
意味ふる十九日発
の書状到る、平山
を始ふる、山木一
ふる。

十一日

雨、廣田博子来
河野義博江戸

閲覧室



東京帝室博物館